大津百町瓦版

春　季　号［No．４３］
２０２０年　　４月
発行　大津の町家を考える会
大津市中央１丁目８－１３
TEL・FAX　077-527-3636

大 津 ・ 町 家 ・ まちなか ・ いろいろ情報

Email：otsu.machiya@gmail.com

これからの疏水通船

私達「びわこ疏水とさざなみの道の会」が三十年に渡り「琵琶湖疏水の通船復活」を提案し続けてきましたが多くの人々の共感と応援を頂き、昭和二六年に交通の発達で閉鎖されていたものが六七年ぶりに平成三十年に復活が実現しました。

おかげさまで平成三一年度の乗船率は九八％ということでホッとしています。現在大津側の乗船は三井寺下の第一トンネル前から京都は、蹴上のインクラインの手前まで四本のトンネルを経て下りは約一時間で八キロを下る。そのトンネルの入口と出口は明治の元勲たちによる揮毫の重厚な扁額とデザインアーチに隅角がある。

しかし何といっても八キロも続く樹齢百年余の山桜の並木は見事です。関西一どころか日本一の圧巻だと思います。四季折々の風景も素晴らしいが特に山科の天智天皇陵付近の風景は森閑として瞑想空間の趣がある。疏水は明治の英知を集めた遺構で関心を持って見ると一辺全が見過ごすことの出来ない遺構の集積です。二千四百メートルもある第一トンネルは長い闇と光へのドラマを覚える異空間も面白いです。

現在の通船状況でも充分堪能できるのですがさらに魅力アップスル為の課題は京都側ではインクラインの早期復活です。高低差六五０ｍをコトコトと結ぶのは大きな目玉です。大津側では鹿関橋と北国橋の間にある閘門を開閉させ琵琶湖の入口三保ヶ崎に三高ボート部艇庫上に大津側の乗船場と願っています。木造の明治風のオシャレのものをと。ここはまた琵琶湖への出発の地でもあります。京阪浜大津港では疏水は明治のコンセプトの意味から言っても似合わないでしょう。

現在通船には明治号、平成号、令和号の三隻ありますが京都と滋賀の創出の為には一０隻の船は必要かと思います。そして琵琶湖疏水は世界遺産に値するものです。市民の盛り上げで日本遺産から世界遺産をめざしたいものです。

【日本画家　鈴木 靖将】

大事な町名の起源　町名は歴史が分かり 町が広がります

昨年の夏季号 №. ４０でも少し書きましたが、現在使用されている中央〇〇丁目〇番〇号では、町の歴史はさっぱり分かりません。子ども達が町の歴史を振り返る機会も無くなってきている今、旧町名を大事にしていきたいです。ここに上げた町名は昭和１２年大津市が発行した『伝説の大津』に載せられていた「町名の起源」から引用したものです。江戸時代の『大津百町』を引継いで一部には維新前との云われも書かれていますが、あくまで昭和１２年時の町名です。

高見町＝土地が高く見晴しのよいために名づけられたと云う。

和泉町＝清泉があったのでかく名づけられたらしい。

境川町＝吾妻川が流れて境をへだてる故の名であると云われ、又糀屋町とも云う。

鍛冶屋町＝在城の頃、鉄砲鍛冶の居住した所であるからかく名付けたと云う。

葭原町＝昔は沿湖の地で葭が生じて僅かに漁家二～三戸しかなかったと云われ、これから出た名で、古地図にはこの辺りを葭原沼としてある。

上下小唐崎町＝坂本から移った時、もとの稱を呼んだのである。

京　町＝京街道の意味で、京町通りの起因である。

石川町＝坂本の地名である。

小川町＝百々川の上流に臨んで居るのでこの名が出来たらしい。

了徳町＝昔、佐々木氏の家臣和田了徳が居住していたので、付けたと云う。

材木町＝昔は沿湖筏の集った所であつたので、かく呼ばれるに至った。

伊勢屋町＝よく解らないが、役をもつて居た人の屋号をとつてつけたとも云はれて居る。

猟師町＝猟師が多く住んで居たので名づけたと居はれている。

玉屋町＝鍛冶屋町と同じく在城の頃、弾丸を製造する所があつた所としてこの名を生じた。

太間町＝昔は絶間町と書いていた、矢張り坂本の町名である。

柳　町＝坂本の町名である。

丸屋町＝役を持っていた人の屋号をとつたものらしい。

菱屋町＝よく知れないが役を持っていた人の屋号をとつたものらしい。

石橋町＝楊枝屋町とも云われ名物の楊枝屋があったので、つけた名であろう。

土橋町＝百々川に土橋を架したのでこの名が生じたのである。

川口町＝川口彌藏(加賀前田家に由緒ありし人)の居住していた所につけられた町名である。

枡屋町＝丸屋町と同じく役を持っていた人の屋号をとったのらしい。

湊　町＝幕府の米蔵に入る米は扇屋關ばかりで荷揚げしたので、ここを湊町と名付けた。

橋本町＝大橋掘りの橋詰であったためかく云われたと云う。此の町はもと濱通りの分のみを橋本町と云い、その北側を彦根蔵屋敷即ち彦根他家と称し、大橋堀の西側を生洲町と云われていたが、維新後合併したものである。彦根他家は井伊藩の治下で、大津町中にありながら賦役等に関しては、一切大津町と無関係であったので、彦根他家と称せられていたのである。

生洲町＝この町は初め橋本町中片側の町であったから橋本町片原町と呼ばれて居たが、中世に至って大橋掘の南部は泉水湧出して所詮生簀としたため終に池洲町といわれていました。

坂本町＝坂本城を移した時、坂本から移住した者が多くこの辺に居た、維新前までは此の町の北側は皆蔵屋敷であった。尚納屋町と呼ばれた町がこの中にあったが、之は維新前には鮮魚の市場があり、魚市が盛に行われて居た、その問屋は納屋新八・納屋庄兵衛・納屋六左衛門・納屋源五郎の四軒であったが納屋源五郎は早くその跡を絶ち、他の三軒のみであって、その他に家がなかったので納屋町と云われていたが維新後坂本町に編入されて今日ではこの名は残っていない。

橋本町に納屋仁兵衛なる豪商がいたらしい。

もともと納屋と云うのは魚問屋の事を納屋と云い一つの業種です。明治４４年編の大津市志によると、江戸・天保年代の両替商には納屋、酒屋、米屋を兼業する者が多く津内(大津内)には１０人の両替屋があったそうです。中でも納屋仁兵衛と称する納屋は大層な豪商でその屋敷には能舞台兼用の座敷も備えていた。また大橋堀による通行の不便を無くすため私費で橋を架けた(現濱通りの京信前)。また嘉永六年(1852)風呂屋關に常夜燈を建設もしたと云います。

白玉町＝濱通り北側の方は、諸藩の蔵屋敷であった。以前は濱通りの方を米屋町と云い横町を藍屋町と称して居た米屋町は米商人のみ居住し、藍屋町は藍屋多く居住していたので、名付けたのだが、明治七年町制改正の時両町の合一の議が起こったか、町名を何れにすべきか決定せず、紛議生じ遂に同年十月を以て県令によって両町合一して白玉町と改めるよう通知を受け決定した。白玉と称する米は品質優良なるものであったと云われている。

南保町＝この名の起こりはよく分からないが、保とは地割の名で、郡郷村保と続き、西土のも保と云う名があるが、その意味は大変に違っている、西土の保は家百軒を云う、尚日本の保は四町で二町四方の地を一保とし、この保をいくつも寄せて一村となすと云われ、此の町にも通保、水保、粟津の別保、南の保町等の名が残っている。

甚七町＝昔、川屋甚七と云う人があって多くの土地を持っていた。それで甚七と呼ばれるに至ったが、元禄年中に其の子孫がこの地で遊女屋を始めた、これが現稲荷新地の始めである。

九軒町＝昔僅かに九軒しかなかったと云うのでつけた名である。

歯黒逗子＝甚七町から中町通りへ出る小路である。又御庵の辻子とも云う、ここから京町通りにでるのを山の辻子と云われるが、その名の起こりは不明である。

堅田町＝天正年間、堅田からの移住民が住居したので名付けられたと云い百操船仲間に堅田町組がある、百艘組織の際に移住したものらしい。

蛭子町＝蛭子神社があるので、かく云う。

八幡町＝八幡神社があるので、かく云う。

平蔵町＝天文一四年船奉行早崎平蔵と云う人が住んで居たので、かく云うと云われ、平蔵は天正二年改易されたと云われている。尚平蔵町の東端を治郎左衛門町と呼んで居たが、これは原田治郎左衛門が居住居したためであるが今日は下平蔵町に編入されてしまった。又小舟入の濱通りを小舟入町とも呼ばれていた。

鍋屋町＝最初居住した豪家の名に因んで鍋屋町と呼ばれるにいたった。

笹屋町＝又櫻町とも云って居たがその起源は不明である、櫻町天皇御登極の後今の名に改めたと云う。

新　町＝坂本の町名に因ったものとも云い、又両替町と共に京都の町名にならったものとも云われている。

大工町＝昔は両替町とも云い、舟大工が住んでいたので、つけた名であると云う。

旧町名の続きは次号に掲載を予定しています。「白玉町」の白玉は白米の事とは編集者初めて知りました。町名について面白いお話がございましたら大津百町館へFAX・メールで連絡戴けますとうれしいです。

江戸東京博物館ニュースVol.１０７から

「百種接分菊」(ひゃくしゅつぎわけぎく)

「百種接分菊」歌川国芳・画（弘化２ 1845）

この国芳が画いた屏風絵ですが、こんなことが実際行われたようです。江戸後期は菊の栽培が盛んになり、その当時の園芸書や番付には百種もの種類があったそうです。また、菊は接ぎ木が可能でこれまで(弘化時代以前)は十種か二十種の接ぎ分けは当たり前に行われていたそうです。ところがなんと江戸駒込の植木屋今右衛門が前代未聞の「百種接分菊」作ったそうで、おそらくお寺か宮さんの境内での菊花展に出され、町民の注目を集め多くの見物の人々が訪れ賑わっている場面を描いたもののようです。赤や黄色、白など、色とりどりに咲いている菊は一本の菊に接ぎ木されて、一つ一つの花に「高砂」「金屏風」「金孔雀」等々雅な名前が短冊に記され、集まった老若男女が眺めています。弘化二年と言えば大津では石場の常夜灯が建設された同じ年です。

荷物にならない大津のお土産

大津絵しおり＆絵葉書

まちづくり「大津百町館」にて販売中

江戸時代後期になると、一般庶民のお伊勢参りや観音霊場巡りが盛んになって多くの旅人が追分から大谷の海道筋を行き来しました。追分には京から移転してきた仏画師が仏画と同じ手法で、風俗画や風刺画を描き始め旅人に大津みやげとして売り、分業で素早く完成する大津絵は人気を集め全国に広まりました。

【 大津絵絵葉書　５種￥５８０ 】

【 大津絵しおり　５種￥３８０ 】

こちらの絵葉書もしおりも厚手の用紙に印刷され丈夫なものです。今も大津絵を求め来られる旅行者や外国からのお客様にプレゼントされると大変喜ばれます。

「大津百町館」で販売しておりますので是非お買い求め下さい。前号で紹介しました安楽さんの「大津百町我儘百景」福山さんの画集も委託販売しています。

まちづくり『大津百町館』で
フリースクールTRIUMPH(トライアンフ)

昨年９月、百町館に「学校にフィットしない子どもたちのためのフリースクールTRIUMPH（トライアンフ）」を開校しました。毎週水曜日の週１回ですが、不登校の子どもたちが日中を過ごせる安心で安全な居場所となっています。不登校になる背景はさまざまですが、子どもたちはみな学びたい、友達をつくりたいと願っています。そんな子どもたちの心に寄り添いながら、ぼちぼち活動を続けてきました。半年がたち、子どもたちに変化が表れ始めています。笑顔や子ども同士の会話や関わりも増えてきました。

中庭に面した大広間でゆったりおしゃべりし、くつろいでいます。

先日、日ごろの活動の成果を発表する場をもとうと、「トライアンフわくわく研究発表会」を開催しました。コロナウィルスの影響で規模を縮小して行いましたが、大変盛況に終わりました。小学５年生の男の子はコーヒー焙煎を披露。また、中学２年生の女の子は動物愛護の観点から「ペットの幸せを考える～飼い主の責任と心構え～」というテーマで研究発表を行いました。その他、イラストや写真など子どもたちの得意なことを紹介するためのパネル展示をしたり、焼きそばを焼いて販売したりしました。

大広間でにぎやかにみんなでボードゲーム

このように、子どもたちが頑っている姿を披露できたのは、発表の場が、いつも活動している百町館だったからこそだと感じています。彼らにとって、「いつもと変わらない場所でいつもと同じことをする」ということがどれだけ後押しになっているか。

百町館の前でコーヒー焙煎をする子どもたち
「焙煎仕立のコーヒーは美味しいですよ！」

そのことを実感する場となりました。これからも、町家を考える会の皆様や、地域の皆様の応援をいただきながら、未来ある子どもたちの育ちと学びをサポートすべく、真摯に活動を続けていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

『大津百町』
こんな家もある

上記二枚の写真は、柴屋町にある同じ建物です。古い写真の時代ははっきりしませんが、四階建ての建物を二階屋にしたものです。四階の屋根部分が二階屋になった屋根に乗っていることが分かります。旧大津建物の歴史を探ってみますと不思議な魅力に取りつかれます。

二月の末に東京からある不動産情報を片手にまだ若い女性が『百町館』を訪ねて来られました。

その方が探しておられる物件を見てびっくりしました。長年「大津の町家を考える会」でも注目し写真にも収め以前から気にはしていた建物ですが、外観から見て朽ち果てていくのを見ているだけでした。その建物が売りに出されていたのです。内部の意匠を見て驚きました。こんなに素晴らしい建物がまだ残されていた。値段は高くはないですが修復には相当な費用が掛かりそうです。

編集後記　大津の春はやはり疏水と三井寺の桜が一番です。表紙トップは本格化する予定の「疎水通船」のことを、日本画家・鈴木靖将さんに絵と文の寄稿をお願いしました。いま三井寺観音堂で行われている古い写真展示を見ると、疏水に沢山の和船が浮かび乗船者が一杯写っています。また今号では百町館を利用するフリースクールＴＲＩＵＭＰＨの活動も掲載。　［ Ｋ．Ａ ］